

学習成果を重視した高等教育の質保証：日本の現状と課題

川嶋太津夫
神戸大学

I 背景

1. 知識基盤社会⇒「知識」そのものではなく「知識を活用する力」が重要
2. 高等教育のユニバーサル化+18歳人口の減少⇒「入口（入学者）」での質保証は困難
3. 高等教育の量的拡大+高等教育予算の削減⇒質への懸念
4. 高等教育のグローバル化⇒学生移動の増加、「学位」の同等性
5. 教育パラダイムから学習パラダイムへの転換⇒教員中心から学生中心へ
6. 質の定義の変化⇒「インプット」「プロセス」から「アウトプット」「アウトカム」へ

II 国レベルでの取組

1. 「学士力」の提案：専攻にかかわらず習得を目指す学士課程共通の学習成果のガイドライン（表参照）
中央教育審議会答申（2008年）「学士課程教育の構築に向けて」
2. 分野別参照基準の策定
日本学術会議で検討中
3. OECDのAHELO フィージビリティ・スタディへ参加
4. 第2サイクルの認証評価における学習成果の重視

III 大学レベルでの取組

1. 「学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」の策定
育成する人材像、修得させる知識・能力の明示と卒業要件の厳格化
2. 到達目標、学習成果を重視したカリキュラム改革
カリキュラム・マップ（マトリックス）の活用
3. アクティブ・ラーニングの導入
4. 電子ポートフォリオの導入と活用

VI 課題

1. 学習成果を重視したアプローチの理解の一層の促進
教育パラダイムから学習パラダイムへの転換の難しさ
2. Backward/Downwardカリキュラム設計の難しさ
学部・学科組織の壁
3. アセスメントの充実
アセスメントそのものの理解不足
4. 学習成果マネジメントを軸とした内部質保証システムの構築
5. 大学の内部質保証システムを支える枠組みの整備
学位の「水準」に関する枠組の欠如

「学士力」

1. 知識・理解

専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解するとともに、その知識体系の意味と自己の存在を歴史・社会・自然と関連付けて理解する。

- (1) 多文化・異文化に関する知識の理解
- (2) 人類の文化、社会と自然に関する知識の理解

2. 汎用的技能

知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能

- (1) コミュニケーション・スキル
日本語と特定の外国語を用いて、読み、書き、聞き、話すことができる。
- (2) 数量的スキル
自然や社会現象について、シンボルを活用して分析し、理解し、表現することができる。
- (3) 情報リテラシー
ICTを用いて、多様な情報を収集・分析して適正に判断し、モラルに則って効果的に活用できる。
- (4) 論理的思考力
情報や知識を複眼的、論理的に分析し、表現できる。
- (5) 問題解決力
問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を確実に解決できる。

3. 態度・志向性

- (1) 自己管理能力
自らを律して行動できる。
- (2) チームワーク、リーダーシップ
他者と協調・協働して行動できる。また、他者に方向性を示し、目標の実現のために動員できる。
- (1) 倫理観
自己の良心と社会の規範やルールに従って行動できる。
- (2) 市民としての社会的責任
社会の一員としての意識を持ち、義務と権利を適正に行使しつつ、社会の発展のために積極的に関与できる。
- (3) 生涯学習力
卒業後も自律・自立して学習できる。

4. 総合的な学習経験と創造的思考力

これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれを適用し、その課題を解決する能力。